

《第486回（2021年11月11日）子どもの本の読書会記録》 参加者：7人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『はじめてであう すうがくの絵本 1』 安野 光雅／著 福音館書店

『はじめてであう すうがくの絵本』は、全3巻で構成されているシリーズです。裏表紙に書かれている対象は、「4才からおとなまで」。ユーモアのある文と絵で、ものの見方や考え方を、小さい子どもでも理解できるようにやさしく紹介しています。今回読んだ第1巻に収録されているのは「なかまはずれ」「ふしぎなおり」「じゅんばん」「せいくらべ」。もともと、別々に出版されていた作品を再編集して、1冊にまとめています。

大人が読んでも、日常生活で当たり前に使っている数や大きさ、量などの概念の基礎を再認識させられます。考えることや発見することの面白さを改めて感じさせられた絵本でした。

次に、読書会に参加された方の感想を紹介します。

●今回初めて読んだ。タイトルを見ると、ただ数学について説明するだけで、挿絵がちょこっとあるような真面目な本かと思ったが違った。ユーモアや、絵本としての魅力もあり、楽しく読んだ。学校の数学では、計算や公式を覚えなさいと言われる。でも、ただ数えたらいいというものではない。子どもは、楽しくないことはしたくない。数学に対して苦手意識や思い込みができる前に、こういう本で楽しく考え方を身に着けられたらいいと思う。

●読んでいたようで読んでいなかった本。「なかまはずれ」の章の、絵を見てなかまはずれを考える場面では、真剣に考えてしまった。単純なようで、ひねりがある書き方だ。タイトルが、「さんすう」ではなく「すうがく」なのはどうしてだろうかと思ったが、数学は、ものの見方や考え方についての学問なんだと、あとがきを読んで納得できた。『博士の愛した数式』（小川洋子）や『天と地の方程式』（富安陽子）を思い出した。

●自分は数学が好きな子どもだった。数学が嫌いだからしない、というのはだめだと思う。論理的に考えたりするために数学の授業は必要だが、やり方次第では嫌い

になってしまう。なので、授業の副教材として、『はじめてであう すうがくの絵本』を使ったらいいのではないか。自分も、お正月に孫に買ってあげようかなと思う。読んでいとなつかしく、思考の原点に引き戻されたような気がした。

●安野さんの絵本は大人になって出会った。『はじめてであう すうがくの絵本』は、伝えたいことがはっきりしていて、こういう風に教えてもらったら分かるな、という感じ。すらすらと読んでいく本ではなく、考えさせてくれる本。「せいくらべ」の章は、まだ数の概念が分からない年齢の子どもが読んでも、すぐに見て理解できる。この本を子どもに手渡す大人のほうが力量を問われそう。子どもと一緒に考えて辛抱強さが必要だと思うから。

●我が家の蔵書の中で、最初で最後の知識の本。子どもが小学生の頃に、数学が好きになってもらいたいという気持ちで購入したが、途中まで読んで挫折していた。この本は、なにも考えずに読むと楽しいが、子どもに何かを教えよう、考えさせよう、という親の欲目がじゃまをする。子どもとのミスマッチが起きなければいいが。「なかまはずれ」という言葉が気になる。ネガティブな意味合いの言葉なので。「ふしぎなおり」では、急に図形が出てきて違和感がある。

●「なかまはずれ」の章のきつねの絵にぷつとふきだしてしまい、そのあとは何が出てくるんだろうと、楽しく最後まで読んだ。こんな算数の授業だったら算数嫌いも減るのでは。イラストで分かりやすく説明してくれて、引っかけ問題もある。だんだん難しくなるけれど、チャレンジすると達成感があって……。教科書もこんな感じだったら良いのになと思った。

次回 12月9日（木）10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『白い紙/サラム』シリル・ネザマフィ/著 文芸春秋

申込み・参加費不要